



丘に建つ大正時代の白石村役場

### 入植とともに始まった行政

官軍との戦争に敗れ、領地も家も職も失った仙台藩士族片倉小十郎の元家来たちは、生活を続けることができなくなったため、新政府が進めた北海道開拓の移民に応じるようになった。

政府は開拓に向かう元武士の600人に北海道移住開拓使貫属（武士の身分をもち、北海道の防備と開拓に従事する者）を命じ、家老職の佐藤孝郷には貫属取締を命じた。佐藤孝郷は22歳と若かったが、明治維新以後の混乱した事態を收拾してきた統率力が評価されたものだった。

佐藤孝郷たちは苦労の末に明治4年（1871）10月に札幌にたどり着いた。冬が間近だったので開拓使は春を待って開拓を始めることを勧めたが、一行はすぐに入植地向かい、超人的ながんばりで小屋掛けを終わらせた。

ここから白石の歴史が始まるのだが、開拓のための資材の手配、井戸掘り、教育などで開拓使と交渉が必要となり、そのときの嘆願書が残されているが、行政はこのときからすでに始まっているといえる。

### めまぐるしく変わる制度

明治5年4月、佐藤孝郷は白石村貫属取締兼戸長を命ぜられ、明治7年（1874）1月には札幌町戸長兼白石・雁来両村戸

長になり、7月には札幌第1大区副区長（札幌全部）となった。区長を置かなかった当時としては、札幌市街を含む札幌すべての執政者になったのである。

町村役場の前身である戸長役場が白石村に置かれたのは明治13年（1880）である。豊平、白石、上白石、平岸、月寒の五村戸長役場が上白石村に置かれ、後に白石村3番地に移された。これから明治35年に二級町村制が施行されるまでの23年間は戸長役場時代である。

明治15年に開拓使が廃止され、北海道は札幌県、函館県、根室県の三県に分けられた。札幌県下の各村は札幌区役所の管轄を離れて札幌外五郡役所に属することになり、明治18年に戸長役場は豊平村6番地に移された。

この三県制はうまくゆかず、明治19年に北海道庁ができて三県は支庁に改められ、白石村と上白石村は道庁の管轄になった。明治30（1897）年5月27日の北海道一、二級町村制公布に伴い、6月13日道庁告示により豊平外四カ村戸長役場から白石村・上白石村戸長役場を分離し、7月15日に白石村47番地（現在の白石会館の場所）に二級町村制白石村役場を開設、9月に札幌支庁（現石狩支庁）の管下に入った。

明治35年4月、二級町村制施行により、白石村・上白石村を合併し、戸長

# 入植の下見をした丘に建つた村 役場が、白石百年の歴史を刻んだ



役場を廃して白石村役場を開設。村議会・村長制に移行した。村名を白石村とし、旧村名を大字白石村・大字上白石村と改めた。

#### 二級村から一級村へ

二級町村制というのは、北海道の特殊事情を考慮して、一級町村制を施行するまでには成長していない町村に対して施行する制度だった。一級町村では町村長、助役、収入役の三役は町村会（今の町村議会）が選挙して北海道庁長官の認可を受けるが、二級町村の三役はすべて長官に任命権があった。

昭和7年(1932)、待望の一級町村制が白石村に適用され、自治権は大幅に拡大された。以来、昭和25年(1950)に札幌市と合併するまでの19年間、一級村として栄えていくが、太平洋戦争の渦中に巻き込まれる不幸な時代でもあった。

この間、明治43年4月、上白石村の一部（旧菊水西町・北町）を札幌区に編入し、大正6年に江別町の一部（現小野幌）を白石村に編入した。

#### 札幌市に編入

昭和24年(1949)に札幌市に編入する話が各所から持ち上がってきたが、当時は上白石地区は住宅地、工場地帯とも急激に発達し、札幌市内とほとんど区別がつかない状態だった。同年に札幌市長から白石村長あてに正式に編入の意向の照会があり、この問題は一気に表面化した。

白石村議会では上白石の一部に限って編入する申し合わせをしたが、他地域から多数の編入陳情があったため、昭和25年の議会で全村編入が決定し、その年の7月に編入が実現するというスピード実現だった。

村役場庁舎は札幌市の白石支所、昭和26年12月からは白石出張所として使われた。昭和47年には札幌市が政令指定都市に移行し、白石区役所が設置されたために庁舎は解体され、跡地の一部に現在の白石会館が建てられた。

（富岡秀義）



札幌市に編入した当時の白石村役場。建物は昭和4年に建てた



昭和23年頃撮影の米軍航空写真。現在の国道12号線に面して庁舎があった。